



働く と 支える

～就労支援の現場ルポ～

1981(昭和56年)年、国連が定めた国際障害者年を機に「障がいのある人もない人もともに生きる」というノーマライゼーションの考え方が日本にも浸透してきました。現在は、障がいのある人が働ける職場環境の整備が重要視されるようになり、社会が障がい個々の特性を理解することで障がい者の働く場が増えてきました。今回の特集では、就労する障がい者と福祉の現場で働く支援者(職員)にそれぞれの仕事に対する想いなどを取材しました。



福岡市中央区にある、ひまわりパーク六本松(福岡市手をつなぐ育成会)に伺い、「絵(アート)」を仕事としている蓑田利博さん(知的障がい)を取材しました。蓑田さんの作品は、大手デパートや企業など数々のグッズやノベルティにも採用され、注目される障がいのあるアーティストのひとりです。

絵を描くようになったのはいつからですか？また、きっかけなど教えてください。

ひまわりパーク六本松には、平成24年の開所時から通っています。それまでは、福岡市植物園の清掃に福祉訓練生として従事しており、清掃作業の休憩時に詰所で余暇として絵を描いているだけでしたが、植物園にある温室ギャラリイをはじめいろいろな場所で展示会をするようになりました。その当時、※エイブルアート・カンパニーの登録作家に選ばれたことで、私の作品に注目が集まるようになり今の仕事として本格的に絵を描くようになりました。

ときめきFukuoka

得意とする分野などありますか？
また、作品が完成するまでにどのくらいの時間をかけますか？

高い建物から見た街の俯瞰図や好きな電車、野球場のグラウンドや観客席の絵が得意です。それらを組み合わせながら画面に散りばめて構成しています。ひとつの作品を完成するまでに2週間くらいかけて仕上げます。作品によっては1ヶ月かかった絵もありました。

絵を描くときはどんな事を考えながら描いていますか？

子どものころ見たもの、旅先で見たもの、普段の生活で見たものを出しながら描いています。例えば、絵を描きながらふと浮かんだ数字が55だしたら、それから帽子のサイズが連想され56、57と続けて描きます。以前、たくさんの人が見ている前でライブペインティングをしたことがありました。普段、人に見られながら絵を描くことがなかったため、少し緊張しましたが最後まで集中して描くことができ、とてもいい経験ができました。

箕田さんの絵がデパートや企業、地域のノベルティなど様々な形で採用されていますね。

私が描いた原画を気に入っていた

だいたいが買ってくれた時はとても嬉しかったです。また、企業のデザインに採用された時は、たくさんの人に見てもらえると思うとワクワクします。そして、事業所のクリアファイルやカレンダーなどのデザインに採用されて、それがバザーなどでたくさん売れた時はよかったです。思います。

これからの夢を教えてください。

私は毎年、海外旅行に出かけています。アメリカ、ヨーロッパなど、これまで色々な国を旅してその国にある人や建物、風景などたくさん見してきました。私の作品のなかには、その時に見た記憶を絵に表現することもあります。そして私の夢は、ドバイ（アラブ首長国連邦）にある、163階の世界一高い超高層ビルとして有名な「ブルジュ・ハリファ」に行つて、最上階から見た景色を描くことです。以前、ドバイを訪れた時は乗継ぎの空港から外に出ることができず行くことができなかったため、また海外旅行に行けるようになったら是非、もう一度ドバイに行つて夢を実現させたいです。

※エイブルアート・カンパニーとは、2007年4月に3つのNPOが共同で運営。障がいのある人がアートを仕事にできる環境をつくることを目的に設立。

障がいのある人のアート（絵画・イラスト・書など）を、広告や商品のデザインに使用することを仕事につなげている。



今年5月に福岡市西区に開所した精神障がい者の「グループホームゆるり2番館」で、10名の入居者の支援にあたる職員の大庭陽子さんにグループホームでの支援についてお話を伺いました。

現在の支援に携わるきっかけや業務内容を教えてください。

以前、病院勤務で作業療法士として身体に障がいのある方に携わっていました。その後、精神科病院での勤務を経験したことで、今の仕事に携わる最初の転機になりました。当時、多くの精神障がいの患者さんと接するなかで、お住まいの地域での生活状況など患者さん一人ひとりの生活全体を含めたケアを考えるようになり、地域で活躍している元同僚からグループホームを紹介してもらったことがきっかけで、「ゆるり2番館」で支援員として勤務することになりました。私の主な業務は、入居者の方の服薬管理や相談、病院や日常の買い物等の同行支援ほか日々の生活を支援させていただいています。

入居者を支援する上で心掛けていること、やりがいを教えてください。

まずは私自身が支援者として入居者の方々の信頼関係を築くことが重要でした。そのため入居者の方が

安心して相談していただけるよう、個々の想いを汲み取り尊重しながら、常に謙虚な姿勢で支援することを心掛けています。また、グループホームでの生活は、状態が不安定な時にも向き合うことがあり、そんな時に入居者の方から学ぶことも多く、支援の難しさを感じることがあります。現在は、一人ひとりの表情に「笑顔がふえてきた」と思えることが私のやりがいにつながっています。これから入居者の方々と共に過ごす時間を大切にしながら、皆さんに受け入れられるよう支援者としての質を高め、日々邁進していきたいと思えます。



グループホームが抱える課題やこれからの展望はありますか？

平成20年、福岡市には約260人分のグループホームしかありませんでした。現在、190を超えるグループホームができ、約1200人分の居室ができました。

私たちは、主に精神障がいのある方の支援を行っていますが、精神科病院に入院している方の中にも、地域での受け皿があれば退院できる方がいます。家の中で、家族との関係が上手くいかずに、病気を再発させる方や親が高齢となり、「自分の子供を将来支えてくれる人がいない。」と心配される方もいます。そういった方々にも、安心して地域で生活できるように環境を整備していく必要があります。今後は、ただ居室が増えればいいというだけではなく、様々な障がい特性を持たれた方の生きづらさに対して、しっかりとサポートできる「人」が大切だと思います。

グループホームは、入居者の方にとっては自分の家です。安心して生活してもらえるのが一番であり、生活をしていくうえでいろいろなことがあっても、傍で一緒に歩んでくれる「人」がいるということが、グループホームの原点ではないかと思えます。



「ゆるり」は、平成24年5月に社会福祉法人そらが開所したグループホームです。主に精神障がいのある方の生活支援を行っています。皆さんからの要望に応じて、令和2年5月に2番館を新築で開所しました。施設名の由来は「ゆるりゆるりとやっていく」です。



【表紙にご協力いただいたみなさん】
写真左から(施設長)米倉貴之様、
大庭陽子様、濱 国彦様
ご協力ありがとうございました。